

フランス語の-oi-

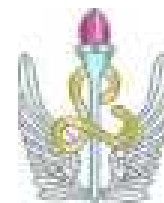
川口 裕司

(東京外国語大学)

日本地理言語学会第8回大会 2026年5月30日
於滋賀大学大津サテライトプラザ



Spatiotemporal
Linguistics



東京外国語大学
Tokyo University of Foreign Studies

<https://www.tufs.ac.jp/ts/personal/ykawa/index.php?id=468>

流れ

はじめに

1. $\bar{E}/\check{I} > \bar{e} > ei$ 二重母音化の要因
2. 中世期に前舌母音eiが後舌母音oiへ：方言との関係
3. oi > oe [oε]、さらに ue [uε]へ：その要因は何か
4. [uε/wε] > [wa]はいつ頃起きたか
5. ALIFOにおけるwε / wa / ε のクラスター分析

まとめ

参考 $\bar{E}/\check{I} > \bar{e} > ei > oi > o\varepsilon > u\varepsilon / w\varepsilon > wa / \varepsilon$

はじめに 問題の所在

2) 複合母音字 *voyelles composées* の発音

ヴォワリエル コンボゼ

フランス語には複合母音字と呼ばれているものがあります。これは2つ以上の母音字が組み合わさって1つの音を出すものを言います。

ai	[ɛ] [e] エ エ	mai [mɛ] 5月 メ	fait [fɛ] 事実 フェ
		air [ɛ:r] 空気 エール	gai [ge] 楽しい ゲ
ei	[ɛ]	Seine [sɛn] セーヌ河 セーヌ	peine [pen] 苦痛 ペーヌ
au	[o]	auto [oto] 自動車 オート	autre [otr] 別の オートル
eau	[o]	eau [o] 水 オ	beau [bo] 美しい ボ
eu	[ø]	peu [pø] 少しもない プゥ	deux [dø] 2 ドゥ
	[œ]	fleur [flœ:r] 花 フルール	
œu	[œ]	cœur [kœ:r] 心 クール	
oi	[wa]	moi [mwa] わたし モワ	toi [twa] きみ トワ
ou	[u]	tour [tu:r] 塔 トゥール	amour [amu:r] 恋 アムール
ay	[ɛj] [ej] エイ エイ	payer [pɛ(e)je] 支払う ペイエ	
oy	[waj]	voyage [vwaja:ʒ] 旅行 ヴォワイヤージュ	

『新・リュミエール フランス文法参考書』、森本英夫、三野博司、駿河台出版社、2013、p.6-7.

文字と発音のずれ

(...) et à nostre françoys il n'avient point, pourquoy est il plus mignard et courtoys tant en la pronunciation qu'a l'escripture: toutesfois se trouve quelque difference entre les deux, en ce que nous ne prononcons pas tousjours comme nous escripvons, et que l'usage en à autrement ordonné, et nous enseigne autrement à faire, laquelle tient en main forte la maniere de parler, d'escrire, (...) (Matthieu 1559, p.33)

引用では当時の活字をできるだけ再現しているが、sは全て現代風に修正した。

(・・・) そして、フランス語ではそのようなことは起こらない。というのは、発音と書記において、フランス語のほうがさらに優美で洗練されているからだ。とはいえ、両者のあいだにはいくらかの違いが見出される。我々は常に書いているとおりに発音するわけではなく、慣用がこれを別様に定め、また別様に行うことをわれわれに教えるからだ。その慣用こそが、話し方と書き方を強く支配している。(・・・)

研究の系譜

Thurot Charles (1881 [1966]) *De la prononciation française*, Slatkine Reprints, Genève.

Nyrop Kristoffer R. (1899) *Grammaire de la langue française*, Tome 1, Det Nordiske Forlang, Copenhagen.

Haudricourt André G. (1949) “Problemes de phonologie diachronique (Français EI >OI)”, *Lingua* 1, 209-218.

Schürr Friedrich, *La Diphtongaison Romane*, Romanistisches Jahrbuch, 8.1, 1957.

Schogt Henry (1960) *Les causes de la double issue de E fermé libre en français*, G.A. van Oorschot, Amsterdam.

Rohr Rupprecht (1963) *Das Schicksal der betonten lateinischen Vokale in der Provincia Lugdunensis Tertia, der späteren Kirchenprovinz Tours*, Duncker & Humblot, Berlin.

Kawaguchi Yuji (1990) “EI > OI > WA en français Pour reconnoître la diffusion du langage”, *Recherches Linguistiques pour A. Martinet*, Tokyo University of Foreign Studies, 41-82.

Lodge R. Anthony (2004) *A Sociolinguistic History of Parisian French*, Cambridge University Press, Cambridge.

Ayres-Bennett, Wendy (2004) *Sociolinguistic Variation in Seventeenth-Century France Methodology and Case Studies*, Cambridge University Press.

いくつかの問題

音変化の過程

話しことばラテン語の強勢開音節における $\bar{E}/\bar{I} > \bar{e}$ の二重母音化
 $\bar{E}/\bar{I} > \bar{e} > ei > oi > o\varepsilon > u\varepsilon / w\varepsilon > wa / \varepsilon$

1. $\bar{E}/\bar{I} > \bar{e} > ei$ の二重母音化の要因は何か
2. 中世期に前舌母音eiが後舌母音oiになったが、
方言との関係はどうだったのか
3. oiから[oε]、さらに[uε]となった原因は何なのか
4. [uε/wε]から[wa]はいつ頃起きたのか
5. 現在の方言で-oi-の実現形はどうなっているか

1. $\bar{E}/\bar{I} > \bar{e} > ei$ 二重母音化の要因

2つの二重母音化

1. 汎ロマンス語的二重母音化

*PĚDE 「足」 > PO pé, SP pie, CA peu, OC pè, AF pié, FR pied,
IT piede, SA pe

*FŎCU 「火」 > PO fogo, SP fuego, CA foc, OC fuòc, AF feu, FR feu,
IT fuoco, SA focu

- ・強勢開音節におけるĚとŎの二重母音化はロマンス諸語の全てにわたってではないが、かなり広い地域で生じた。
- ・時期はおそらくロマニアの東西分裂以前（5～6世紀頃）であった。
- ・この二重母音化は開音節構造と強勢が組み合わさった結果もたらされた音現象だった。

ポルトガル語(PO)、スペイン語(SP)、カタルーニャ語(CA)、オック語(OC)、フランス語(FR)、イタリア語(IT)、サルデーニャ語(SA)、古フランス語(OF)

2. ガリア北部の二重母音化

*SĒRU 「夕方」 > AF seir, FR soir, OC ser

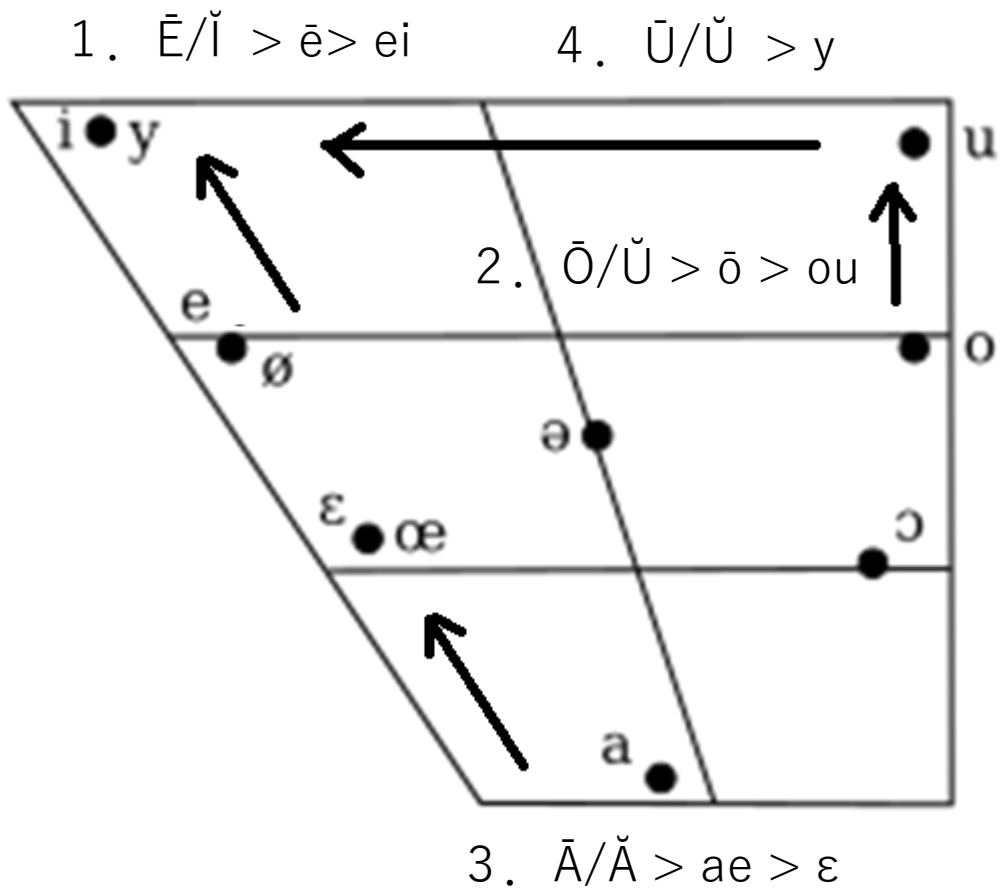
*VĪA 「道」 > AF voie, FR voie, OC via

*SŌLU 「唯一の」 > AF seul, FR seul, OC sol

*DŪOS 「2」 > AF deus, FR deux、 OC dos

- ・強勢開音節における Ē/Ī と Ō/Ū の二重母音化は、フランス語が話されることになったガリア北部地域だけで起きた。
- ・時期はおそらくフランス語成立期（7～8世紀）。

ガリア北部の二重母音化の要因



フランス語成立期の4つの母音変化

1. $\bar{E}/\bar{I} > ei$ 、2. $\bar{O}/\bar{U} > ou$

『ユーラリの続唱』

bellezour (l.2) < BELLATIÖRE 「とても美しい」

sostendreiet (l.9) '(elle) soutiendrait' 「彼女は耐えるだろう」

mei (l.66) 'moi' 「私を」

『ヨナの説教』

reiel (l.95) 'royal' 「王の」、haveir (l.117) 'avoir' 「持つ」

fereiet (l.140) 'ferait' 「彼はするだろう」

3. $\bar{A}/\bar{A} > ae > \varepsilon$

『ユーラリの続唱』 maent < MANET 「いる」

4. $\bar{U}/\bar{U} > y$

ノルマン地名 Étainhus < stein-hus "pierre-maison"

要因：調音の上昇傾向による $\bar{e} > ei$

音変化の過程

話しことばラテン語の強勢開音節における $\bar{E}/\bar{I} > \bar{e}$ の二重母音化

$\bar{E}/\bar{I} > \bar{e} > ei > oi > o\varepsilon > u\varepsilon / w\varepsilon > wa$

残りの疑問：

2. 中世期に前舌母音eiが後舌母音oiになったが、方言との関係はどうだったのか
3. oiから[oε]、さらに[uε]となった原因は何なのか
4. [uε/wε]から[wa]はいつ頃起きたのか
5. 現在の方言で-oi-の実現形はどうなっているか

2. 中世期に前舌母音eiが後舌母音oiへ： 方言との関係

当初、綴り字 ei と oi は語源が異なる

イングランドのアングロ・ノルマン写本

『アレクシス伝 Vie de Saint Alexis』L写本(1120年頃)

綴り字 ei: reis (l.24) 「roi、王」、seit (l.25) 「soit、be動詞接続法現在」

綴り字 oi: voiz (l.292) < VŎCE 「voix、声」、
noise (l.422) < NAUSEA 「noise、騒音」

『ロランの歌 Chanson de Roland』Oxford写本(1100年頃)

綴り字 ei: reis (l.1)、mei (l.20) 「moi、私」

綴り字 oi: voiz (l.1561) 「voix」、noise (l.1005)

12世紀初頭では、Ē/Ī > ei、-ŎCE/-AUSEA > oiの合流はない

北仏では -oi- が定着

13世紀、北フランスでもフランス語の写本活動が始まる。

Vitry城代Huesの文書(1234年発給、ChâlonsのScriptoriumで書写)

綴り字oi: savoir (l.1)「知る」、avoir (l.5)「持つ」、
moi (l.7, 14)「私」

Argensolles聖母修道院の作成したSaint-Pol伯の文書(1236年)も同様

13世紀の北フランス語の文書では、-oi-の綴り字が優勢

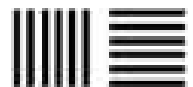
西部の-ei-と北部・東部の-oi-

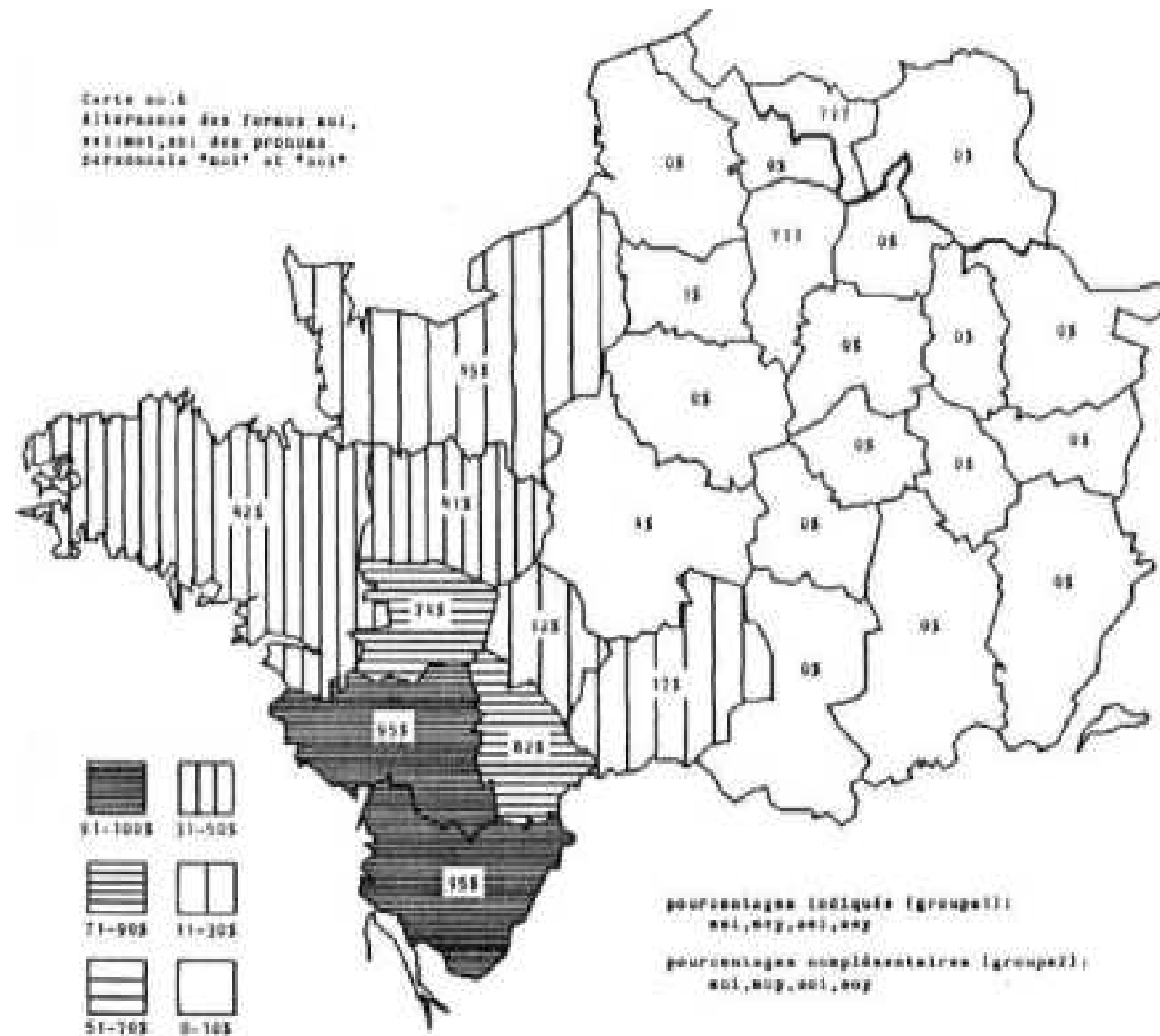
13世紀の古文書の綴り字分析
-ei-と-oi-の綴り字の言語地理学的特徴

綴り字-ei-：北仏の西部地域

Anjou、Touraine、Poitou、Saintonge、Bretagne、
Normandie 等

綴り字-oi-：東部地域に移動すると-oi- が支配的

 綴り字-ei-の地域、数値は%



綴り字 -oi- の拡大

『フランス語の正書法 Orthographia gallica』

(アングロ・ノルマンのT写本) (13世紀末)

Item moi toi soi foi Roi et similia possunt scribi per o vel per e secundum diversitatem et usum lingue Gallicane.

「また、moi, toi, soi, foi, Roi およびそれに類する語は、フランス語の違いと慣用に応じて、o でも e でも書いてよい。」

(Kristol 1989)

13世紀末になると、eiとoiの綴り字が共存し、綴り字 -oi- を受け入れるようになった。語源の違う -ei- と -oi- は合流した。

接触の結果

-ei-変種と -oi-変種の接触

Ē/Īを起源とする moi「私」、roi「王」の綴り字 -oi- は、
Ē/Īを起源としないvoiz「声」< VŌCE、noise「騒音」
< NAUSEA に合流した。

両者は綴り字 -oi- で表記されるようになった。

古フランス語のvoizやnoiseは中英語に借用され、voice、voisce、woice、noise、noyse等の形で現れ、現在に至るまで後舌母音oを保ち続けている。

3. oi > oe[oε]、さらに ue[uε]へ：
その要因は何か

oeの証拠

文法家 Sylvius (Amiens出身)

Adverte tamen oî vel oÿ diphthongum in his & propè reliquis pronuntiari, vulgo à Gallis hiatu immodico, & òe exprimi verius, quam oî vel oÿ, (...)

「ただし、これらの語、またほかの語でもほとんど、二重母音 oî または oÿ は、フランス人には一般に過度の母音分離を伴って発音され、したがってそれは oî や oÿ と表すよりも、むしろ òe と表すほうがより正確である、という点に注意されよ。

(Sylvius 1531, p.106)

文法家 Ramus (Vermandois出身)

point等のように鼻子音の前にくる -oi- を除いて、全て -oè- と記載している。

(Ramus 1572, p.38)

広い [ɛ] の記述

文法家 Louis Meigret (Lyon出身)

Au contraire en moy, toy, soy, nous oyons la fin de la diphthongue, non seulement en e, mais encore, en é ouuert, qui est moien entre a & e clos, & par consequence bien estrange de la prononciation de l'i, ou y grec. Nous escrirons doncq loé, roé et loyal, royal.

「これに反して、moy, toy, soy においては、私たちはその二重母音の語末を、単に e としてだけでなく、さらに開いた é としても聞くのであり、それは a と閉じた e との間にあるもので、したがって i、すなわちギリシアの y の発音とはたいそう異なっている。ゆえに私たちは loé, roé、そして loyal, royal と書くことにしよう。」 (Meigret 1545, p.46-47)

-oi- は -oe-, -oa- へと発音が揺れていたことがわかる

空の格子の埋め合わせ

フランス語成立前の母音体系

/i/	/u/
/e/	/o/
/ɛ/	/ɔ/
/a/	

[u] > [y] の後の母音体系

/i/	/y/	← /ou/
	↑	
/e/	/o/	
/ɛ/	/ɔ/	
/a/		

(Kawaguchi 1987)

構造言語学的説明

最初期のフランス語で $u > y$ の変化が起きた結果、 u が空の格子となり、 $o > ou$ の変化によって格子は補完された。

実際には、 $\bar{o} > ou > u$ の変化であり、 $ol > ou > u$ との合流という形で13世紀末頃から変化する。

結果として、変化の中間段階として o と ou [u] の発音の揺れが起きた。

ouïisme 「ウ発音」

*TÖTTU 「全て」 > tot > tout (綴り字 tot / tout)

*DIÛRNU 「日」 > jor > jour 「日」 (綴り字 jor / jour)

*MÛLTU 「たくさん」 > molt > mout (綴り字 molt / mout)

文法家 Peletier は方言変異とする

l'è pris garde ~~e~~ quelque~~e~~foes a cela, e è trouuè que c'èt ~~e~~ vice ~~e~~ de certains païs, comme ~~e~~ de la Gaule Narbonnoese, Lionnoese, e de quelques adroez de l'Aquiteine: ou iz diset *le haut bot* 'bout', *un huis óuert* 'ouvert', *du vin roge* 'rouge': Aucontrere, *un mout* 'mot', *une chose*, e *des pourreaus* 'porreaux'. (Peletier du Mans, 1550, p.31)

「私は以前からその点に時々注意していたが、これはフランスのナルボンヌ地方、リヨン地方、アキテーヌ地方の幾つかの土地に見られる一種の癖だと分かった。そこでは人々は、たとえば bout、ouvert、rouge のような語をそうした発音 (= [o]) で言う。これに対して、mot、chose、poireaux は (= [u]) になる。」

oe[oe]からue[ue]への変化はouïismeの影響であろう。

4. $[u\varepsilon/w\varepsilon] > [wa]$ はいつ頃起きたか

Palsgrave (1530)の記述

イギリス人文法家 John Palsgrave

3つの変異形 [oi]、[oɛ]、[oa]について

(...) for sometyme lyke as we sounde *oy* in these wordes “a boye, a froyse, coye”, and such lyke, and sometyme they sounde the *i* of *oy* almost lyke an *a*.

「…）というのは、私たちが a boye 「少年」, a froyse 「卵料理」, coye 「内気な」 およびそれに類する語において *oy* を発音するのと同じように、彼ら（＝フランス人）はそう発音することもある。時には *oy* の *i* をほとんど *a* のように発音するからである。」
(Palsgrave 1530, p.13)

ouïismeを考慮し、[wɛ]/[wa]は16世紀には一般化していた。

Palsgrave の語例から言えること

[oa]の現れる音環境は、単音節語では-oys, -oyt, -oyxの時、たとえばboys [boa]「林」、soyt [soa]「be動詞接続法形」、uoiz [voa]「声」の語で、多音節語は、francoys [-soa]「フランスの」、memoyre [-moar]「記憶」、uicloire [-toar]「勝利」等である。これらはいずれもラテン語の強勢開音節のĒ/Īに由来しない -oi-である。

Palsgraveの説明を信じるとすれば、当時、Ē/Ī以外に起源をもつ -oi- において、-oe- > -oa- の変化が起きていたということになる。唯一、Ē/Īに由来する半過去形disoyt [-zoa]「言った」が含まれる。

[oa/wa]の証拠

Ad illa verò quod attinet quae prima in exemplum attuli, *Mois, Fois, Trois, Pois*, monendus es de quadam ineptissima eorum aliorúmque huiusmodi pronuntiatione: quasi nimirum literis *o* et *a* in diphthongum coeuntibus scriptum esset, *Moas, Foas, Troas, Poas*. Ita enim non pauci, errorem vulgi (Parisini praesertim) sequentes, pronuntiant.

さて、私が最初に例として挙げた *Mois, Fois, Trois, Pois* について言えば、これらおよびこの種の語の、きわめて不適切な発音について、あなたは注意するべきであろう。すなわち、あたかも文字 o と a が結びついて二重母音をなしているかのように、*Moas, Foas, Troas, Poas* と書かれているように発音することである。実際、このように、民衆の誤り、とりわけパリの人々の誤り、に従って発音する者は少なくない。

(Henri Estienne 1582, p.48)

[wε]を[wa]と発音するのはパリの民衆発音であるとする。

[wɛ]の残存：カナダ・フランス語

Jusqu'ici les seuls titres de gloire de Beaulieu étaient son vin blanc sec, ses chemises en soie, un champion local de course à pied

これまでのところ、Beaulieu にとって名誉となるものは、辛口の白ワイン、絹のシャツ、そして地元の陸上競技のチャンピオン……だけであった。（PFCのReading Taskから）

1. Trois-Rivières, カナダ, 53歳, 医療従事者 [glwa:ɾ] [swæ/ɛ]



2. Trois-Rivières, カナダ, 21歳, 大学生 [glwa:ɾ] [swɛ]



3. Trois-Rivières, カナダ, 52歳, 大学生 [glwa:ɾ] [swa]



ラテン語の強勢開音節のĒ/Īに由来する -oi- : soie < lat. SĒTA

ラテン語の強勢開音節のĒ/Īに由来しない -oi- : gloire < lat. GLORIA

oi [wε /wa] から ei/ai [ε]へ

Corruptissime vero Parisiensium vulgus Dores π λ α τ α ῖ ζ ο ν τ α ς imitati, pro, voirre, vitrum: sive vt alij scribunt, *verre, foirre*, palea farracea: scribunt et pronuntiant *voarre*, & *foarre*: itidémque pro *trois*, tres, *troas*, & *tras*.

パリの民衆は実に乱れたやり方で、ドーリア人風に母音を広く発音する者たちをまねて、voirre「ガラス」、あるいは別の綴りで verre「ガラス」、また foirre「麦わら」を、voarre、foarre と書き、またそのように発音する。同様に trois「三」を troas、さらには tras と書き、またそのように発音する。

(Bèze 1584, p.48)

パリの民衆発音では、[wε]を [wa]、さらに半母音[w]を脱落させ、[a]と発音する。

-oi- と -ai-(= -ei-)の綴り字の併用

フランス語

競合状態

François [wɛ /wa] 「人名」 / Français [ɛ] 「フランス人」

danois [wɛ /wa] 「デンマーク語」 / anglais [ɛ] 「英語」

古形と現在形

roide [wɛ/wa] / raide [ɛ] 「硬直した」

roine [wɛ/wa] / reine [ɛ] 「王妃」

voirre [wɛ/wa] / verre [ɛ] 「ガラス」

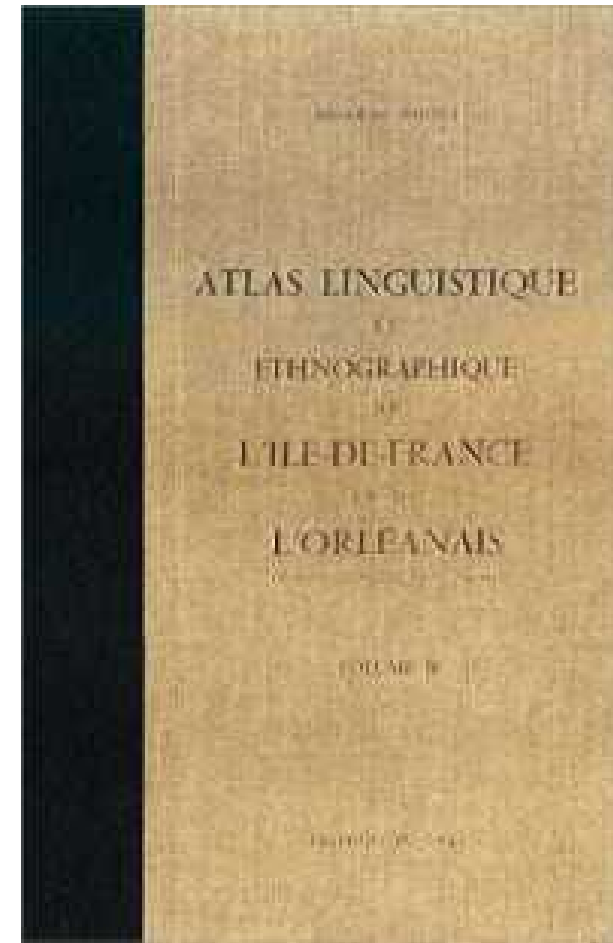
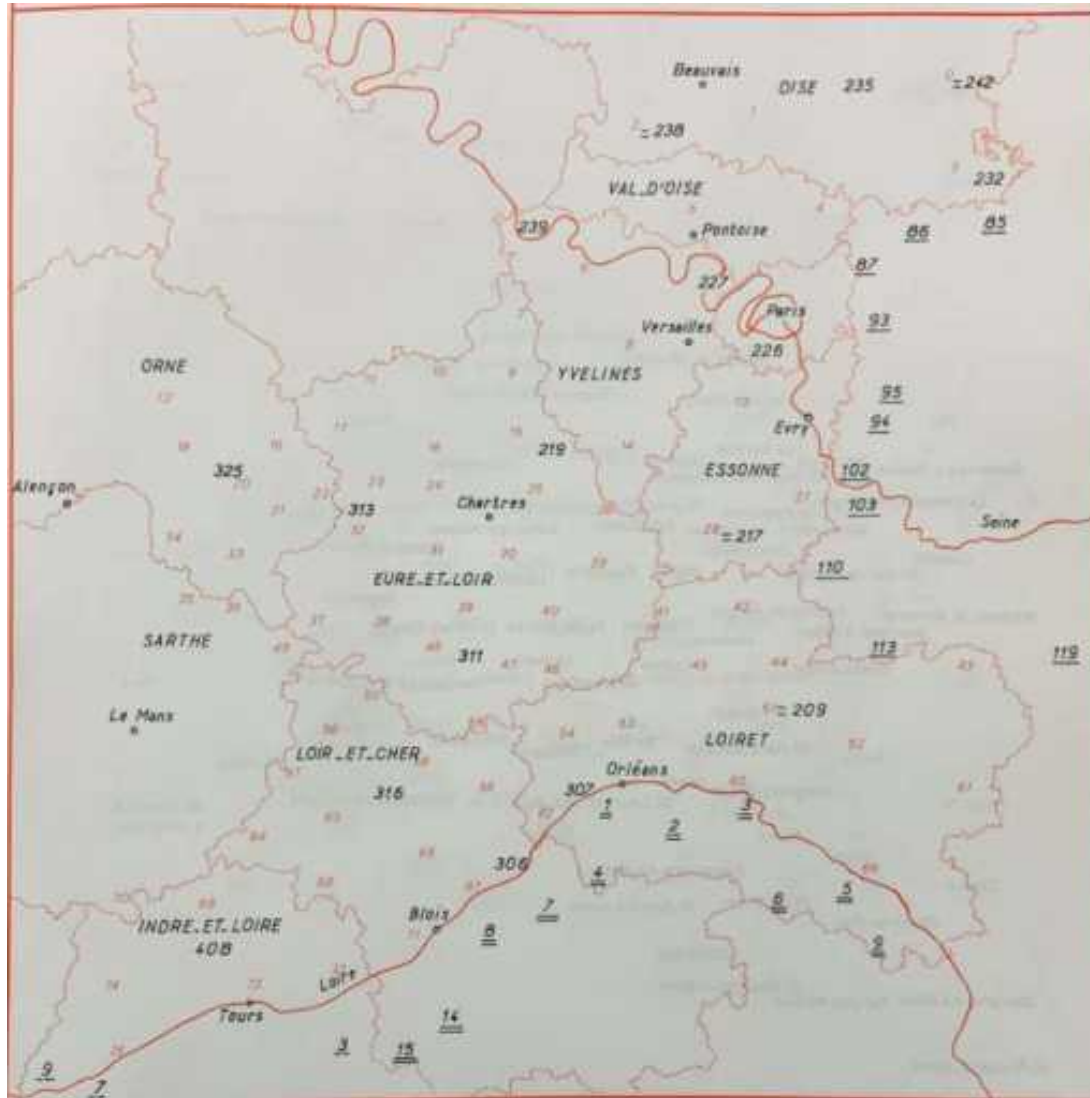
Erondelle (1605)の観察

An other Observation, newly noted. Whereas our Countrymen were wont to pronounce these wordes, *connoistre* to knowe, *apparoistra* it shall appeare, *Il parle bon François* he speaketh good French, *Elle est Angloise* she is an English-woman, as it is written *oi*, or *oy*: now since few yeares they pronounce it as if it were written thus, *coonnétre*, *apparétra*, *fraunsés*, *Aungléze*. (Erondelle 1605, p.40)

新たに気づいた別の観察事項。以前われわれイギリス人は、*connoistre* 「to knowe 知る」、*apparoistra* 「it shall appeare それが現れるだろう」、*Il parle bon François* 「he speaketh good French 彼はフランス語が上手い」、*Elle est Angloise* 「she is an English-woman 彼女はイギリス女性だ」といった語を、*oi* あるいは *oy* のように書かれているとおりに発音するのが常であった。ところがここ数年は、それらを、あたかも *coonnétre*、*apparétra*、*fraunsés*、*Aungléze* と書かれているかのように発音する。

5. ALIFOにおける $w\varepsilon / wa / \varepsilon$ のクラスター分析

パリ周辺部の言語地図



Marie-Rose Simoni-Aurembou,
Atlas linguistique et ethnographique de
l'Île-de-France et de l'Orléanais,
2 volumes, 1973, 1978.

-oi- 20枚の言語地図

強勢位置 6枚

- 83 (labourer) droit (前の畝に沿って) まっすぐ (耕す)
- 258 noix クルミ
- 274 petit pois グリンピース
- 319 (un) bois 林
- 442 le froid 寒さ
- 603 l'oie ガチョウ

強勢前位置 6枚

- 259 noisetier ハシバミ
- 260 noisette ハシバミの実
- 268 poireau ポロネギ
- 361 croissant 柄の長い鎌
- 415 (le) croissant de la lune 三日月
- 461 un moineau スズメ

語末子音前位置 8枚

- 28 semoir 種まき用の袋
- 41 avoine 燕麦
- 139 foin moite 湿った干し草
- 413 une étoile filante 流れ星
- 443 l'eau froide 冷水
- 449 loir オオヤマネ (大冬眠鼠)
- 562 (la) mâchoire du porc 豚の顎肉
- 658 la couloire (à lait) 牛乳濾し

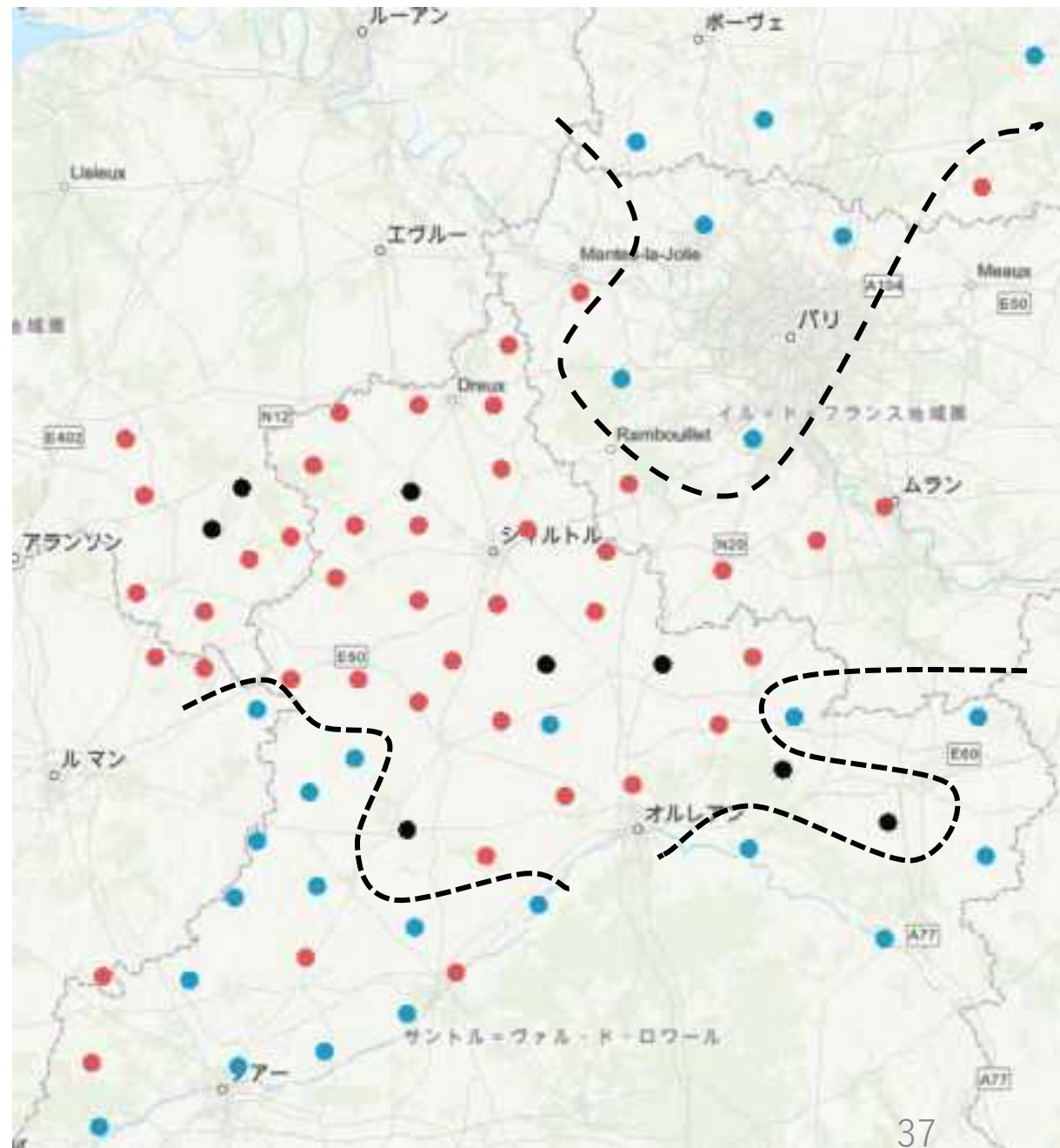


全般 -oi- [wε / wa / ε]

クラスター	地点数	wε	wa	ε
1 (青) wa優勢	26	28.3%	53.1%	18.6%
2 (黒) we 特に優勢	8	70.1%	16.6%	13.3%
3 (赤) wε 優勢	42	52.0%	31.0%	17.0%

wε / wa / ε の3群について分析
20枚の地図、76地点、各地点での出現率を数値化

wε系は広く分布する。wa系はパリ周辺、
 オルレアンから西部に広がる。ε系はいずれの
 地域でも頻度が低い。



語源と wε / wa / ε

-ei-系語源

83 (labourer) droit (前の畝に沿って) まっすぐ (耕す) < lat. directum

274 petit pois グリンピース < lat. pisum

442 le froid 寒さ < lat. frigidum

-oi-系語源

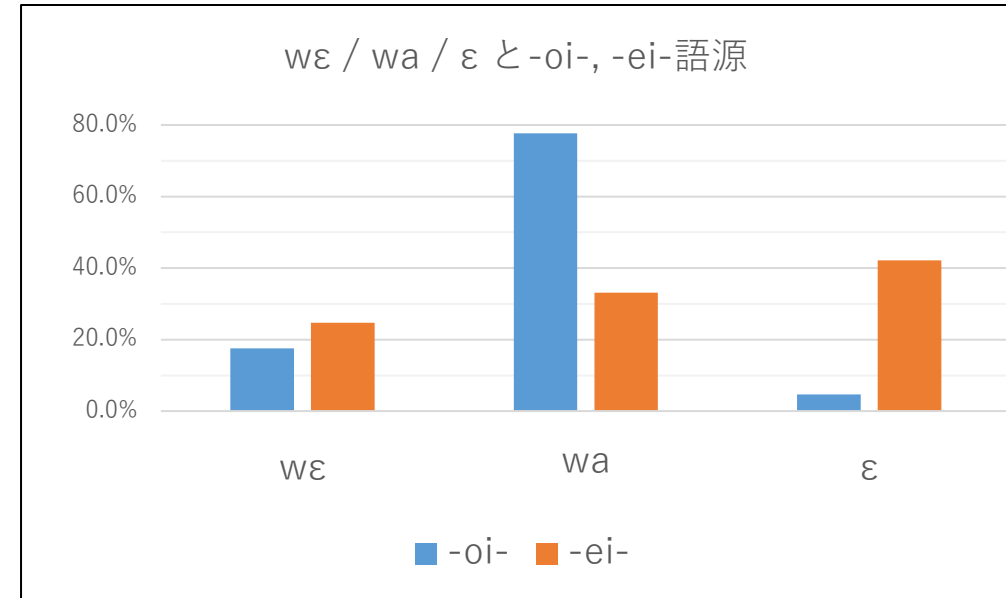
258 noix クルミ < lat. nux

319 (un) bois 林 < frk. bosk

603 l'oie ガチョウ < lat. auca

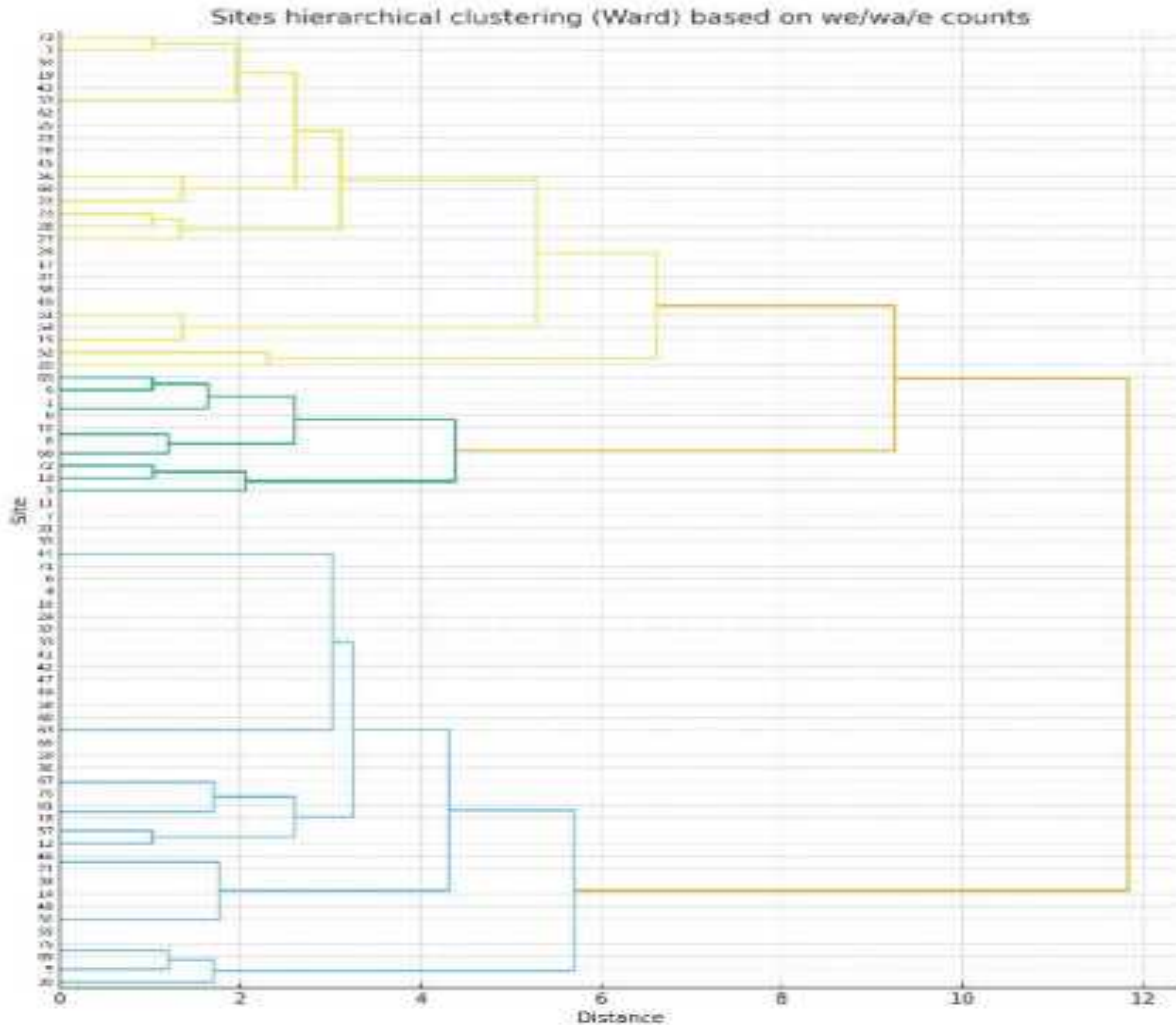
- oi-系語源はwa系が明らかに優勢 (Palsgraveの例と一致)

- ei-系語源はwε, wa, ε混合、ε系が多数



語源	言語地図	wε	wa	ε
-oi- wa優勢	258, 319, 603	17.6%	77.7%	4.7%
-ei- ε優勢	83, 274, 442	24.7%	33.1%	42.2%

強勢位置の -oi-



6枚の地図

- 83 (labourer) droit (前の畝に沿って) まっすぐ (耕す)
- 258 noix クルミ
- 274 petit pois グリンピース
- 319 (un) bois 林
- 442 le froid 寒さ
- 603 l'oie ガチョウ

we / wa / e の3群について分析

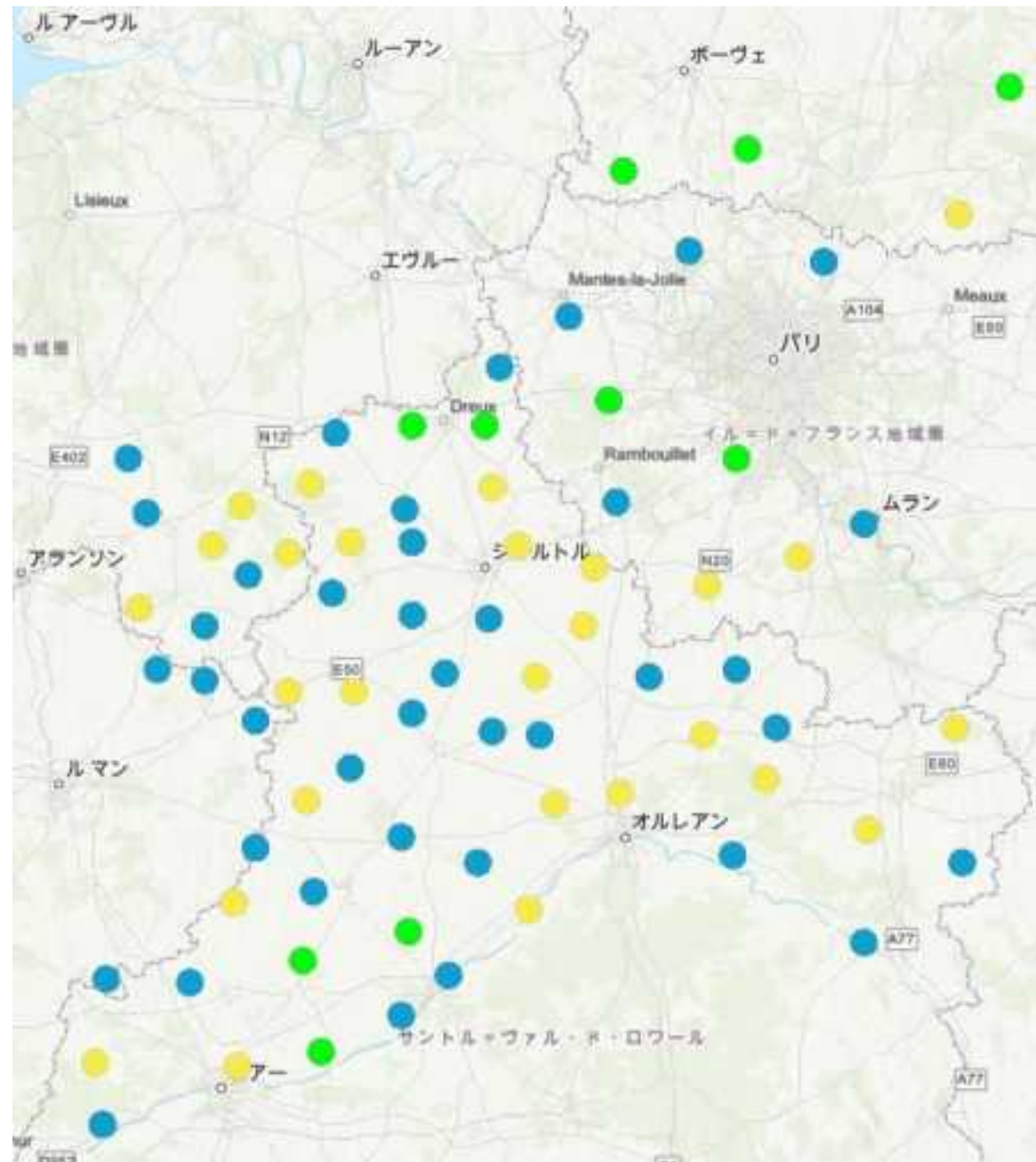
6枚の地図、76地点、各地点で0～6での数値化

クラスター	地点数	we	wa	e
1 (青) wa / e 拮抗	39	0.90	2.85	2.15
2 (緑) wa 優勢	10	0.80	4.80	1.20
3 (黄) we 優勢	2	4.50	0.50	1.00
4 (黄) wa と we	25	1.92	3.08	0.88

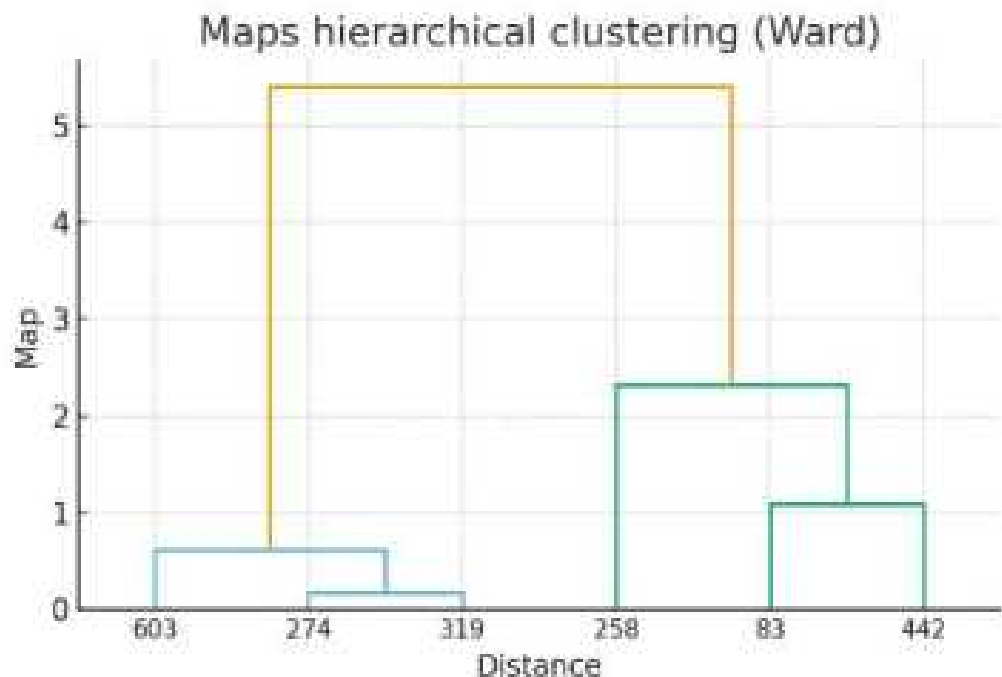
地点プロット

クラスター	地点数	$w\varepsilon$	w_a	ε
● w_a / ε 拮抗	39	0.90	2.85	2.15
● w_a 優勢	10	0.80	4.80	1.20
● $w\varepsilon$ 優勢	2	4.50	0.50	1.00
● w_a と $w\varepsilon$	25	1.92	3.08	0.88

- w_a / ε 拮抗は、広く分布
- w_a 優勢は、周圏分布的？
- $w\varepsilon$ 優勢も広く分布



言語地図と $w\epsilon$ / wa / ϵ



83 (labourer) droit (前の畝に沿って) まっすぐ (耕す)
 258 noix クルミ
 274 petit pois グリンピース
 319 (un) bois 林
 442 le froid 寒さ
 603 l'oie ガチョウ

クラスター	言語地図	$w\epsilon$	wa	ϵ
A (青) wa 圧倒	274, 319, 603	4.4%	92.5%	3.1%
B (緑) $w\epsilon, \epsilon$ 優勢	83, 258, 442	38.7%	12.2%	49.1%

- ・ 特定の語で wa (言語地図 274, 319, 603)
- ・ 特定の語で $w\epsilon, \epsilon$ (言語地図 83, 258, 442)

まとめ

研究設問への回答

1. $\bar{E}/\bar{I} > \bar{e} > ei$ の二重母音化の要因は何か
→ 調音上昇傾向による一連の二重母音化の一つ
2. 中世期に前舌母音eiが後舌母音oiになったが、
方言との関係はどうだったのか
→ ei変種とoi変種がイル・ド・フランス地域で接触
3. oiから[oɛ]、さらに[uɛ]となった原因は何なのか
→ ouïismeとの関連性が強く疑われる
4. [uɛ/wɛ]から[wa]はいつ頃起きたのか
→ 16世紀にはすでに一般化
5. 現在の方言で-oi-の実現形はどうなっているか
→ waはパリ周辺で、-oi-系語源に多い

参考文献

- Ayres-Bennett, Wendy (2004) *Sociolinguistic Variation in Seventeenth-Century France Methodology and Case Studies*, Cambridge University Press.
- Ayres-Bennett Wendy et Magali Seijido (2011) *Remarques et observations sur la langue française. Histoire et évolution d'un genre*, Classique Garnier, Paris.
- Chaurand Jacques (1972) *Introduction à la dialectologie française*, Paris, Bordas.
- Clerico Geneviève (1999) "Le Français au XVIe siècle", in *Nouvelle Histoire de la Langue Française*, J. Chaurand (eds), Seuil, Paris, 146-224.
- Coq Dominique (1988) *Documents Linguistiques de la France (série française), 111, Chartes en langue française antérieures à 1271 conservées dans les départements de l'Aube, de la Seine-et-Marne et de l'Yonne*, Éditions du CNRS, Paris.
- Dees Anthony (1980) *Atlas des formes et des constructions des chartes françaises du 13e siècle*, Tübingen, Max Niemeyer.
- Gysseling Maurits (1949) "Les plus anciens textes français non littéraires en Belgique et dans le Nord de la France", *Scriptorium* 3, 190-209.
- Haudricourt André G. (1949) "Problèmes de phonologie diachronique (Français El >Ol)", *Lingua* 1, 209-218.
- Kawaguchi Yuji (2008) "Sur les fonctions indicatrices chronologique et géolinguistique des scriptas médiévales : le cas des actes champenois méridionaux (1230-1300)", Le Premier Congrès Mondial de la Linguistique française, le 9 juin, 2008, Paris, 241-253.

- Kawaguchi Yuji (2002) *Recherches linguistiques sur le champenois méridional au moyen âge – Aspects phonétique et graphiques* -, Atelier National de Reproduction des Thèses, Lille.
- Kawaguchi Yuji (1994) "Suffixe –ette (< lat. –itta) en Champagne et en Brie à la lumière des Atlas Linguistiques", *Zeitschrift für romanische Philologie*, 110 (3-4), 410-431.
- Kawaguchi Yuji (1990) "El > Oi > Wa en français Pour reconnoître la diffusion du langage", *Recherches Linguistiques pour A. Martinet*, Tokyo University of Foreign Studies, 41-82.
- Kawaguchi Yuji (1987) "Systèmes distincts, fluctuations ou variantes graphiques en ancien champenois", *La Linguistique* 23/2, 87-98.
- Kristol André Max (1989) "Le début du rayonnement parisien et l'unité du français au moyen âge : le témoignage des manuels d'enseignement du français écrits en angleterre entre le XIIIe et le début du XVe siècle" dans *Revue de Linguistique Romane* 53, 1989, pp.335-367.
- Merrilees Brian and Sitarz-Fitzpatrick Beata (1993) *Libert Donati A Fifteenth-Century Manual of French*, Anglo-Norman Text Society.
- Lodge R. Anthony (2004) *A Sociolinguistic History of Parisian French*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Nyrop Kristoffer R. (1899) *Grammaire de la langue française*, Tome 1, Det Nordiske Forlag, Copenhagen.
- Pfister Max (1973) "Die sprachliche Bedeutung von Paris und der Ile-de-France vor dem 13. Jahrhundert", *Vox Romanica* 32, 217-253.
- Rohr Rupprecht (1963) *Das Schicksal der betonten lateinischen Vokale in der Provincia Lugdunensis Tertia, der späteren Kirchenprovinz Tours*, Duncker & Humblot, Berlin.

Schogt Henry (1960) *Les causes de la double issue de E fermé libre en français*, G.A. van Oorschot, Amsterdam.

Seguin Jean-Pierre (1999) “La langue française aux XVIIe et XVIIIe siècles”, in *Nouvelle Histoire de la Langue Française*, J. Chaurand (eds), Seuil, Paris, 336-344.

Simoni-Aurembou Marie-Rose, “Aspects phonétiques de L'Atlas de l'Île-de-France et der Orleanais : unité ou diversité ?” *Les Dialectes romans de France à la lumière des atlas régionaux*, Ed. du C.N. R. S, 1973, pp. 379-400.

Thurot Charles (1881 [1966]) *De la prononciation française*, Slatkine Reprints, Genève.

川口裕司 (2025) 「17世紀以前の二重母音-oi-」, 青山フランス文学論集33, 青山学院大学フランス文学会, 5-22.

文法家等 (出版年代順)

Palsgrave, Jean (1530 [1852]) *L'Eclaircissement de la langue française*, éd. F. Génin, Paris.

Sylvius, Jacobus (1531) *In linguam Gallicam isagoge et Grammatica Latino-Gallica*, Paris.

Meigret, Louis (1545) *Traité touchant le commun usage de l'écriture françoise*, Paris.

Peletier du Mans (1550) *Dialogue De l'Ortografie e Prononciation Françoisese*, Paris.

Matthieu, Abel (1559) *Devis de la langue francoyse*, Paris.

Ramus, Petrus (1572) *Grammaire*, Paris.

Estienne, Henri (1582) *Hypomneses de Gallica Lingua*, Paris.

Bèze, Théodore de (1584) *De Francicae Linguae Recta Pronvntiatione*, Genève.

Eronde, Peter (1605) *The French Garden, being an instruction for attayning the French tongue*, London.

Corpus des grammaires françaises de la Renaissance, Classique Garnierも適宜参照した。

ArcGIS Online <https://www.arcgis.com/index.html>

本日のPDF

<https://www.tufs.ac.jp/ts/personal/ykawa/index.php?id=468>

ご清聴ありがとうございました。



本研究は
国際共同研究加速基金(国際先導研究) 24K23937
「時空言語学」の創成：地理と歴史を融合した言語の変化と発展への新たなアプローチ

および

基盤研究B 25K00427



日本学術振興会(JSPS)研究調査委託費 2019-2022

の補助を受けました。